

対人恐怖心性を抱える青年のアイデンティティ形成と世代継承性の発達 —江戸川乱歩のトータリティがホールネスに再統合される過程についての検討—

The process of identity formation and development of generativity in a youth with anthropophobic tendency: Edogawa Rampo's biographical analysis on the process of reintegrating from totality to wholeness

三好 昭子

はじめに

文部科学省は平成20年(2008年)3月、子どもたちの現状をふまえた持続可能な開発のための教育(ESD)(ユネスコが中心となり世界中で取り組まれている教育)に向けて、「生きる力」をはぐくむという理念のもと、小・中学校の学習指導要領を改訂した。「ゆとり」でも「詰め込み」でもない、これからの社会において必要となる「生きる力」を身に付けるためである(文部科学省,2010)。さらに文部科学省(2017)は、ESDが今後のSDGs(持続可能な開発目標)実現の鍵となることから学習指導要領を改訂し、新しい時代を生きる子どもたちに必要な力を3つの柱として整理した。それが実際の社会や生活で生きて働く知識及び技能、未知の状況にも対応できる思考力、判断力、表現力、そして学んだことを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力や人間性である。またOECD(経済協力開発機構)では、2015年からEducation 2030プロジェクトを進めている。2030年という近い将来において子どもたちは不安定(Volatility)、不確実(Uncertainty)、複雑(Complexity)、そして曖昧(Ambiguity)な時代を生き抜く力が必要になってくる(それらの頭文字をとってVUCA(ブーカ)という)。つまりOECD(2018)

はEducation 2030プロジェクトの中で、子どもたちに新たな価値を創造する力、対立やジレンマを克服する力、そして責任ある行動をとる力の育成につながるカリキュラムや教授法などについて検討している。

このように世界的な規模で教育の目指すべきところが議論され、子どもたちに知識や技能だけではなく社会的スキルを基盤にした複合的な能力を身に付けさせようとする流れがあることがわかる。大学生においてもジェネリック・スキル(知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能)の育成が求められており、中央教育審議会(2008)が学士課程共通の学修成果「学士力」に関する参考指針として挙げている。ジェネリック・スキルはコミュニケーションスキル、数量的スキル、情報リテラシー、論理的思考力、問題解決力などで構成されており、「若年者就職基礎能力」(中央職業能力開発協会,2004)や「社会人基礎力」(経済産業省,2006)とともに注目されている。いずれも社会に出た際にすぐに要求される能力であり、他者と協力して問題を解決していく能力や他者との適応的な関係を構築・維持・調節していく能力といった社会的スキルを基盤にしている部分が多い。

しかしながら青年期は、対人恐怖症が好発す

る時期である。対人恐怖症とは「他人と同席する場面で、不当に強い不安と精神的緊張が生じ、そのため他人から軽蔑されるのではないかと、嫌がられるのではないかと案じ、対人関係からできるだけ身を退こうとする」(笠原, 1993, p515) 心の病気である。日常生活に支障がない程度の対人恐怖は一般青年に広くみられ、対人恐怖心性 (anthropophobic tendency) と呼ばれている。対人恐怖心性に関する研究は、大学生と対人恐怖に悩む者を対象に「悩み」を自由記述によって収集し分析した研究にはじまり (小川, 1974), 対人恐怖心性尺度 (堀井・小川, 1996, 1997) が作成され、実証的な研究がおこなわれてきた。例えば大学生における対人恐怖心性の時代的推移を検討するために堀井(2011)

は、2008年に改訂後の対人恐怖心性尺度 (堀井・小川, 1996, 1997) を用いて検討している。そのデータに、その後のデータを比較する形で Table1 にまとめたところ、すべての下位尺度の得点が上昇傾向にあることが示唆された。社会においてコミュニケーションスキルなどの社会的スキルが求められれば求められるほど、青年たちは自らを評価される対象として認識し、社会や世間に要求されている能力を自分が所有していないことに恐怖や恥ずかしさ、不安を強く感じるようになるのではないだろうか。実際、原田・島田 (2002) は、自分の社会的スキルを低く評価している人ほど対人不安を感じやすいことを示している。

Table1. 大学生における対人恐怖心性尺度 (堀井・小川, 1996, 1997) 得点の推移

	堀井(2011)		渡部(2011)		木村(2019)			
	1993年		2008年		2017年			
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD		
尺度Ⅰ<自分や他人が気になる>悩み	12.69	5.83	14.30	6.43	15.08	3.31	17.08	5.99
	13.88	6.10	14.36	6.39			17.58	6.11
尺度Ⅱ<集団に溶け込めない>悩み	12.93	6.41	14.55	6.76	10.88	2.75	16.85	7.00
	12.07	6.79	13.68	7.52			14.83	6.96
尺度Ⅲ<社会的場面で当惑する>悩み	12.81	6.28	13.78	6.86	18.12	7.72	16.04	6.97
	13.64	6.70	13.20	6.69			15.68	7.40
尺度Ⅳ<目が気になる>悩み	9.27	6.26	11.78	7.06	15.32	7.84	13.25	7.49
	8.99	5.93	11.25	7.04			12.44	7.86
尺度Ⅴ<自分を統制できない>悩み	12.48	5.59	13.66	6.28	16.13	6.20		
	13.25	5.36	13.34	6.10				
尺度Ⅵ<生きることに疲れている>悩み	10.01	5.84	11.92	6.59	13.28	6.39		
	9.53	5.61	11.49	6.24				

注) 上段が男子大学生, 下段が女子大学生, 渡部(2011)は男女別データなし

永井 (1994) もまた、青年期における公的自意識の増大にともなう対人関係の距離感についての戸惑いや緊張に注目し、人見知り、過度の気遣い、対人緊張を対人恐怖の心性として検討

し、中学・高校・大学生と学校段階があがるほど対人恐怖の心性が高いことなどを示している (岡田・永井, 1990)。対人恐怖心性尺度 (堀井・小川, 1996, 1997) も対人恐怖の心性を測定す

る尺度（岡田・永井，1990）も，他者から見た自分の姿への過剰な意識，とくに他者に否定的にみられるのではないかと，嫌な思いをさせているのではないかとといった恥の感覚に近い意識を意味する因子が多く含まれており，対人恐怖性がアイデンティティ拡散の恥の感覚を中心とした自意識過剰のあらわれであるという指摘もある（相澤，2004）。

このようなアイデンティティ危機と対人恐怖心性との関連を実証的に検討した研究の中には，対人恐怖心性と第二の分離個体化との関連について自我同一性を考慮に入れた検討をおこなったもの（清水・川邊・海塚，2005）や，対人恐怖心性と自己愛の2軸によって5類型を導き出し（清水・川邊・海塚，2007），自我同一性や精神的健康との関連（清水・川邊・海塚，2008），および自己に対する偏った認知特性（清水・岡村，2010）について類型ごとに検討したものもある。さらに日本のように他者との関係性を重視する社会においては，関係に対する過剰な配慮が対人恐怖心性に影響することを示し，アイデンティティ危機において対人恐怖心性が自覚されやすいことを示した研究もある（谷，1997）。しかしながらこういった実証的研究においては，アイデンティティ概念を俯瞰的にとらえ，アイデンティティのあり方を含めた対象者本人の内的な心理力動を扱うことが難しい。

三好（2008，2014，2016，2018）はアイデンティティ概念を理解する上で鍵となるアイデンティティのあり方（Figure1: 三好，2018）に着目し，ホールネス（wholeness）とトータルティ（totality）について，青年期のアイデンティティ発

達の観点から論じてきた。アイデンティティ拡散のあらわれとして，トータルに悪を選択する否定的アイデンティティ形成のメカニズムを谷崎潤一郎の伝記資料を用いて示したり（三好，2008），アイデンティティが拡散した状態よりは例えネガティブであっても何者かになろうとして「どうせ私は価値のない人間」というように否定的アイデンティティを選択する心理力動・メカニズムが現代青年にもみられることを調査研究のレビューと面接データの分析により明らかにしている（三好，2014）。またトータルに死を選択した三島由紀夫を取り上げ，トータルティに向かう無意識的な心理力動性がいかに強く，システムティックなものであるかを示した研究もある（三好，2016）。さらに三好（2018）は，友人関係，親子関係，生徒—教師関係を中心に，中高生のアイデンティティ形成および生徒・進路指導に潜むトータルティの現代的問題について考察した。

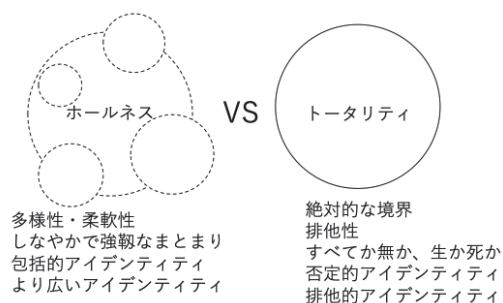


Figure1. アイデンティティのあり方（三好，2018）

以上のように三好（2008，2014，2016，2018）は，アイデンティティ拡散にともない，トータルティに頼ることによって一時的な応急措置として否定的アイデンティティを選択することがあると同時に，生か死かという二者択一から死

を選択したり、トータルにキャラを演じたりする可能性を論じてきた。その中ではトータリティが対人関係にも及び結果として対人関係を維持することが困難な現象(三好, 2014)も論じられている。また清水・岡村(2010)が示した過敏特性優位型は、「自己の高みを完全追求する姿勢は弱いが、“何事も失敗してはならない”との非現実的な認知を土壌としており、徹底した否定的自己観のため、自己を他者視点からネガティブに判断しやすく、失敗を繰り返し考え込む悪循環から抜け出せない認知特性」(清水・岡村, 2010, p27-28)が示唆されている。また誇大—過敏特性両向型の特徴、すなわち「“高い要求水準を達成すべし”と“失敗は絶対に許されない”との非現実的な両命題の板挟みになる上、不完全性の隠蔽を目的として完全主義・強迫的に対処せざるを得ない」(清水・岡村, 2010, p28) また「強い自己嫌悪感の脅威に晒され続けるため、不安定な自己感に陥り易く、対人関係における被害的認知や失敗を考え込む悪循環から抜け出せない認知特性」(清水・岡村, 2010, p28)が明らかにされている。これらはいずれも対人恐怖的心性の特徴であり、アイデンティティのあり方としてはトータリティの状態だと考えられる。

そこで本論文では対人恐怖心性についてアイデンティティ拡散にとまとうトータリティのあらわれとしてとらえ、対人恐怖心性を抱えた江戸川乱歩の伝記資料を用い、乱歩の対人恐怖心性とアイデンティティ形成過程との関連を考察する。山田・宮下(2014)は対人恐怖心性を抱える大学生を対象として、学生相談を通して介入しつつ、アイデンティティ形成過程と対人恐

怖心性との関連を考察し、アイデンティティ形成に向けた心理的援助について検討したが、「生涯発達における青年期」という視点からの分析は不可能である。三好(2015)は青年期に一時的にトータリティに頼りながらも生涯を生き抜いた谷崎潤一郎・江戸川乱歩と、自殺によってその生涯を閉じた芥川龍之介・三島由紀夫を比較検討し、トータリティに頼る前のホールネスの生成程度が、トータリティに頼った際の自己破壊的行動・欲求の程度に影響する可能性を示唆した。本論文では、アイデンティティ形成のさらに先の段階である世代継承性の発達についても視野に入れ、生涯発達における青年期の対人恐怖心性とトータリティの様相を明らかにし、再びホールネスに再統合される過程について検討する。まず1. 江戸川乱歩の生涯を概観し、2. 乱歩の対人恐怖心性とトータリティの様相について指摘する。そして3. 成人期以降の世代継承性とホールネスの様相と比較し、4. トータリティからホールネスに再統合され、世代継承性発揮を可能にした要因について検討する。

1. 江戸川乱歩の生涯

日本の小説家、評論家である江戸川乱歩(本名:平井太郎)は、1894年(明治27年)に三重県名張町に生まれた。1916年に早稲田大学政経学部を卒業し、十数種の職を転々とした後、『二銭銅貨』で認められ、近代日本探偵(推理)小説の先駆をなした。ペンネーム江戸川乱歩はエドガー・アラン・ポー(1809-1849)をもじったものであることは有名である。完全犯罪計画を精神分析の方法で見破る『心理試験』などで

トリックの妙を発揮した本格短編の手法を確立後、『パノラマ島奇譚』などの長編、妖異な雰囲気満ちた『陰獣』、『押絵と旅する男』など、推理小説のさまざまなスタイルを開拓した。また少年向けに、明智小五郎と小林少年をはじめとする少年探偵団が活躍する作品『怪人二十面相』等を多数発表した。その他、探偵小説に関する評論（『幻影城』など）でも知られる。第二次世界大戦後は日本探偵作家クラブ（後の日本推理作家協会）の創立と財団法人化に尽力し、私財を投じて江戸川乱歩賞を制定する、推理小説雑誌『宝石』の編集にあたるなど後進の育成に努め、推理小説界の隆盛に貢献した。

2. 乱歩の対人恐怖心性とトータリティの様相

1) 乱歩の気質といじめの影響

乱歩は気質的に（もともとの性質として）内向的で空想好きだったと考えられる。少年時代は巖谷小波の「世界お伽噺」の国に住んでおり、「夜、暗い町を歩きながら長いひとりごとをしゃべる癖があった。」（江戸川、1935, p125）と述べている。また「小学の一、二年の頃だと思ふ。いやに淋しい子供で、（中略）この世のはかなさ味なさを連想（中略）たった一人ぼっちの気持ちだった。命のはかなさ、死の不思議などが、ごく抽象的な色合いで私の頭を支配した。（中略）（断っておきますが、当時私には祖母も父も母も健在で、兄弟もあり、召使もあり、家庭はごく暖かだったのです。」（江戸川、1926b, p41-42）と説明を加えるほど秘密があった傾向があり、自分だけの神様を祭り、その神様が友だちだから、他の子どもにいじめられても淋しくないのだと信じていた。小学校4年生ごろま

ではいじめ加害者がいなかったのが順調だったが、11歳で高等小学校に入学してからいじめ加害者が現れ、中学になってもそれが続いた。器械体操が不得手で同級生に笑いものにされ、性格的にも内向的でいじめられやすかったという。「[「いじめられっ子」]がいやで休みもしたが、ほんとうに病身でもあった。病床の空想生活が現実の生活よりも楽しかった。休むものだから、学課も優等とはいけなくなり、その方の魅力もだんだんとおとろえて、学校が一層面白くなかった。現実社会というものが私の敵になった。（中略）いずれにしても、このことが、私の生涯に最も強く響いていることはまちがいない。」（江戸川、1953b, p77-78）と振り返って述べている。「現実社会というものが私の敵」という表現からも、すでに敵か味方かという二者択一がみられ、この頃からトータリティの影響を垣間みることができる。

2) ひきこもりの経験

中学1年のころにはひきこもりも経験している。「憂鬱症みたいな病気にかかって、二階の一と間にとじこもっていた。（中略）【天文学の本により】宇宙の広さを知り、地球の小ささを知り、自分という生物の虫けら同然であることを感じて、憂鬱症の原因はそういうところからもきているのだが、中学生としての勉強など無意味になって、天体のことばかり考えていた。」（江戸川、1936, p60）というように、思索癖が本格化してくる。「恋愛ばかりでなく、全ての物の考え方がだれとも一致しなかった。しかし、孤独に徹する勇気もなく、犯罪者にもなれず、自殺するほどの強い情熱もなく、結局、偽善的

(仮面的)に世間と交わって行くほかはなかった。」(江戸川, 1953b, p78-79)という。18歳で中学を卒業する頃にはいじめられることもなくなったが、父親の破産により高等学校進学を諦め、すべての華やかなことと絶縁状態となった。そんな中で早稲田大学予科2年に編入し、印刷屋に住み込みでアルバイトをしながら通学することができた。しかし「何人か並みの交わりができない、特殊階級の人間のような感じで、青春の交友もほとんどしないまま陰気に早稲田大学を卒業した。」(江戸川, 1953b, p78)と述べている。ここでもトータルにとじこもることを選択したり、仮面によってキャラを演じるなどトータリティの影響がうかがえる。

3) 繰り返す転職

大学を卒業後、毎日同じことを繰り返す仕事を続けられず、また思索にふける時間がなくなること耐えられず、30歳で専業作家を決意するまでに十数種の職を転々とするが、その理由として「心にもない職業についていると(職業というものは常に私にとっては心にもないのである)『一体なんのために生きているのか』という疑問に堪えられなくなって来る」(志村, 2009, p108)と述べている。「社交術でも腕力でも、あまりの弱者であった少年は、現実の、地上の城主になることをあきらめ、幻影の国に一城をきずいて、そこの城主になってみたいと考えた。」(江戸川, 1935, p127)というが、これほどまでのトータリティがあろうか。乱歩にとって完璧な幻影の国からすると、就職はあまりにもグロテスクな現実であり、「居たたまらなくなっては自から身を引いて、次から次と奉

公先を転々した。現実世界には、どこの一隅にも身の置きどころがないの悲しんだ。」(江戸川, 1935, p128)と述べている。

4) 活字との密約

大学を卒業してから十数種の職業を転々とした乱歩だったが、29歳で「新青年」に「二銭銅貨」が掲載され、30歳で専業作家を決意した。しかし乱歩の小説好きは子どもの頃からであり、祖母や母親が小説を読み耽る傍らで挿絵を眺めたり、その話を聞かせてもらったりしていた。そして11歳のときには蒔蕪版の少年雑誌を作り、13歳で父親からたくさんのお小遣いをもらい4号活字を何千本も買った。「私はそれで自分の文章を印刷し、自分の少年雑誌を作った。こうして十三歳の私は直接活字そのものと縁結びをした。一生活字と離れられない密約を交わした。」(江戸川, 1955b, p76)という。そのとおり、中学時代には雑誌「中央少年」を自主発行したり、大学生になってからも新聞を企画してそれに掲載する小説を書こうと試みたり、学友と回覧雑誌を作ったり、地元代議士の機関紙編集を引き受けたり、探偵小説覚え書きを手製本したりしている。さらに就職先の機関紙編集に従事したり、智的小説刊行会を創設し、同人雑誌「グロテスク」を計画したり、大阪時事新報の記者として、あるいは大阪毎日新聞社広告部に就職したこともあった。「社交術でも腕力でも、あまりの弱者であった少年」(江戸川, 1935, p127)と述べているように、他領域では適性を感じられなかった乱歩だったが、文章を書くことに関しては活字と一生離れない密約を交わすほどの有能感をもっていたことがうかが

える。

5) 完全な「今ひとつの世界」を創造するものとして

専業作家を決意した翌年、31歳が乱歩にとってもっとも多くの短編を書いた年であり、「D坂の殺人事件」、「心理試験」、「屋根裏の散歩者」、「人間椅子」といった乱歩の代表作が並んでいる。乱歩は日常から離れた「今ひとつの世界」に我々人間がいかにか憧れているかを指摘し、「わたしもまた、わたしの拙ない文字によって、わたし自身の「今ひとつの世界」を創造することを、一生の願いとするものでございます。」(江戸川、1926a, p132)と述べている。33歳のときに出版された『江戸川乱歩集』の売れ行きはよく、立派な舞台を与えられていくつかの小説を書いた。しかし自分では「普通の意味の小説が如何に下手であるかを証明したにすぎなかった」(江戸川、1926d, p183)と自己嫌悪に陥り、トータルに休筆宣言をするにいたっている。下宿・筑陽館を開業し、25歳のときに結婚した妻にその下宿屋を営ませ、「ついに筆を折る決意をして、1人ぼっちで長い放浪の旅に出た。」(江戸川、1957c, p121)という。

ところが編集者たちは乱歩の原稿を諦めておらず、休筆宣言中にも原稿依頼はあった。こうして休筆宣言から1年2ヶ月後、34歳のときに「新青年」に「陰獣」の連載を開始すると、「陰獣」のために異例の雑誌再版という人気ぶりだった。それにもかかわらず乱歩にとって「陰獣」は「私が従来書いたものの総決算にすぎず、何らの新味なく、進歩性、将来性が感じられず、「またか」という感じのものであった。」(江戸川、1926d, p185)という。「休業状態から筆を執り

出して「陰獣」「芋虫」「押絵と旅する男」「蟲」という風を書いて来たが、たとえそれらが一部では好評であったとしても、作者自身はどうにも自信が持てなかった。(中略)私は淋しさのあまり自暴自棄な気持になって行った」(江戸川、1926d, p186)と述べている。また「旧来の友人読者などから悪評の雨をあびていて「新青年」編集部にも久しくごぶさた、諸方に合わす顔がないという厭人的心境」(江戸川、1953a, p292)でもあったが、作家としての人気は高まる一方だった。37歳には「虚名いよいよ高く、売文生活二十年間を通じ、収入支出共に最も多かった年」(江戸川、1954, p433)であり、「表面上は、私の生涯で最も賑やかな年であったが、私は決して生きることを楽しんではいなかった。(中略)相変わらずの人嫌いもそこから来ていた。恥しくて文壇の会合などにも、進んで出たことは一度もなかった。虚名があがるにつれて、身をせばめ世間をせまくしていたのである」(江戸川、1954, p435)。そして38歳で2回目の休筆をし、またすぐに連載を開始するが、途中で書けなくなる。このように世間での人気とは裏腹に、トータリティによって完全な「今ひとつの世界」を創造することを目指しては挫折を繰り返していた。

乱歩は自分を、「我儘な人嫌いで、孤独を愛し、孤独の放浪を愛し、家にいれば終日床の中で暮らす」(江戸川、1957d, p209)と表現したり、「孤独厭人的な小説家の私」(江戸川、1953a, p312)と述べている。さらに「僕は正月〔この原稿は正月に書いたので〕はいつも不機嫌だ。年中行事つまり社交の季節が異端者に合わないからである。僕の恐れるもの、宴会、婚礼、葬式」(江

戸川, 1956a, p679) というように、社交嫌いの孤独な小説家の背景にはトータリティによる対人恐怖心性があったと考えられる。

6) 「今ひとつの世界」を愛好・研究するものとして

転機は乱歩が40歳で中央公論に「石榴」を発売した際であり、次のように述べている。「年初の『悪霊』の失敗につぐこの「石榴」の悪評並びに無反響は、私の自信をそぐこと甚だしかった。(中略)私はすでにして私の時代が去っていることをハッキリ感じたのである。『石榴』以上の何か新しいものを含んだ作の創作欲が起るにあらざれば、もう探偵読者に読んでもらうものは書けない、書く気がしないという考えになった。そこで、これより後の数年間は、自分がもう現役作家でないことを自覚し、そういう立場から探偵小説界のために何かの仕事をしたと考え、いささかそれを実行したわけである」(江戸川, 1955a, p600)。

こういった経緯から41歳で「日本探偵小説傑作集」を編纂し、「折角選集を出すからには、そういうものを書いてみたい」(江戸川, 1955a, p634)と選者の史的評論も書き、後に廉価版を出すほどの売れ行きとなった。また「世界探偵名作叢書」の監修もしているが、「私はすっかり乗り気になって、まだ知られていない長篇傑作の大量紹介を志し、本気になって、その作品選定に当たったのであった。(中略)〔注、(中略) 愛好家、研究者への転身は、実はこの昭和十年のころから始まっていたわけである〕」(江戸川, 1955a, p636)。さらに中央公論社の「世界文芸大辞典」の探偵小説の項も執筆しており、「日本は勿論、西洋の文芸辞典でも、探偵

小説は殆ど文芸扱いをされず、探偵作家の人名なども、ごく僅かしか載っていないことを、私は常に不満に思っていた。(中略)私はこれまでに出た百科事典や文芸辞典の「探偵小説」の項を、専門家が執筆していないために、記述が曖昧であったり、間違いがあったりするのを見て、ひそかに不満に思っていたので、この機会になるべく多くのスペースをとり、出来るだけ正確な記述をしておくのも、探偵小説オールド・ボーイの一つの仕事だと考えたので、進んで執筆を引き受けることにした。(中略)上記のような小説以外の仕事をしたのは謂わば通俗長篇で探偵小説を墮落させたお詫び心のようなものであった。(中略)以上列記した事柄は、仕事といえるほどの仕事ではなかったかも知れないが、同じ時期に幾つかの純娯楽長篇小説を書いたよりは、重要な思い出として残っている。」(江戸川, 1955a, p645-648)。

完全な「今ひとつの世界」を創造することを目指してきた乱歩だったが、上述のように「今ひとつの世界」を愛好・研究するものとしてのアイデンティティが確立し始めると、これまでに引き受けてこなかった種類の仕事も引き受けるようになっていく。トータリティからホールネスへの再統合のあらわれであろう。42歳には、雑誌社からの強い要請によって初めて少年物を執筆し、「怪人二十面相」の連載が始まった。「どうせ大人の雑誌に子供っぽいものを書いているんだから、少年雑誌に書いたって同じことじゃないかという気になったのであろう」(江戸川, 1956a, 670)と述べているが、画期的な歓迎を受け、「子供からの手紙が驚くほど来た。」(江戸川, 1956a, p671) というように、そ

れなりの手応えを感じていたと考えられる。

3. 成人期以降の世代継承性とホールネスの様相

戦後の乱歩が、人が変わったように社会的になったのは自他ともに認めるところである。52歳のときに「私のところへ遊びにくる若い人(同好者や作家志望)がにわかに多くなり」(江戸川, 1958a, p225), 毎月土曜会を開いた。これが後の日本探偵作家クラブ(現在は、日本推理作家協会)となり、初代会長をつとめた。また同時に「各地の同好に会って、相励まし、その道を盛んにするための旅行という意味を含ませ」(江戸川, 1958b, p273), 各地で探偵小説行脚として講演した(53歳)。また54歳においては捕物作家クラブの「創立発起人にも加わり、その後も会員として、いろいろな催しにも出席した」(江戸川, 1959, p310)。58歳で日本探偵作家クラブの名誉会長に就任し、60歳で私財を投じて江戸川乱歩賞を制定、62歳で翻訳家ミステリ・クラブの顧問となり、63歳で次のように述べている。「私はここ三年ほど推理小説雑誌「宝石」の編集を引き受けているが、推理小説界を盛んにすることは、それ以前からもたえず心がけてはいた。日本探偵作家クラブを作ったのも、「江戸川乱歩賞」という生意気なものを設定したのも、現在「宝石」を編集しているのも、すべてそういう気持のあらわれである。戦前の私は人ぎらいで社交をしなかったので、なにもできなかったが、戦後は人づきあいがよくなり、いろいろ作家誘い出しにもつとめたのである。」(江戸川, 1962, p609-610)。さらに69歳で日本推理作家協会を創設し初代理事長に就任するなど、70歳で亡くなる直前まで、乱歩は日本の

探偵小説を広め、後進の育成に心血を注ぎ、推理小説を隆盛に導くことに尽力した。社交嫌いの孤独な小説家とは逆で、「戦後の私は、探偵作家仲間でも随一の宴会好きになっている。婚礼にも喜んで出席する。講演の依頼にも応じるし、座談会も好きだし、ラジオ、テレビにも気軽に出る」(江戸川, 1956a, p679)ようになったと自ら振り返り、次々と世界を広げ、それを楽しんでいる様子がうかがえる。この変化の過程を検討したところ、以下のとおりである。

4. トータリティからホールネスに再統合される世代継承性発揮を可能にした要因

1) アイデンティティの確立

「2. 乱歩の対人恐怖心性とトータリティの様相」で示したように、「1) 乱歩の気質といじめの影響」、「2) ひきこもりの経験」、「3) 繰り返す転職」、「4) 活字との密約」、「5) 完全な「今ひとつの世界」を創造するものとして」、「6) 「今ひとつの世界」を愛好・研究するものとして」というように、アイデンティティが確立していくにしたがってトータリティは弱まり、徐々にホールネスに再統合されていくことが示唆された。

2) 基本的信頼感の高さ

三好(2015)が指摘しているように、ここではトータリティに頼る前のホールネスの生成程度、すなわち第I段階の基本的信頼感の高さを取り上げたい。乱歩は小学校から中学校にかけていじめられ、不登校やひきこもりも経験し、現実社会が自分の敵になったという表現をしているが、幼少期からあたたかく家族に支えら

れ、基本的信頼感は高かったと考えられる。乱歩の父親はよく働き、政治経済上の自由主義者だったため、「子供などにも自由放任の態度で、何の干渉もしなかった。」(江戸川, 1958c, p38) という。事業が失敗した際にも、父親が「涙を流して私たちにお詫び」(江戸川, 1958c, p39) をいうほど、子どもたちや家族を大切にしていたと考えられる。乱歩が職業作家に転身する際にも父親は「それもよかろう、一つやって見るさ」と諒承してくれた。母は小説などで暮らしが立つのかと、随分心配したらしいが、すべて父の意見に従う人であったから、別に異議を持ち出すこともなかった。」(江戸川, 1951, p83) という。乱歩の母親もよく働く、地味で謙虚な人柄で「嫁しては姑に従い、老いては嫁に従った。「私は丑の年だから、めったに怒らない。その代わり怒ったらとめどがない」と、母は口癖のようにいていたが、私はとめどなく怒ったのをまだ見たことがない」(江戸川, 1958c, p40) と振り返っている。このようにあたたかい養育環境の中で大切に育てられた乱歩は、トータリティに頼っていたときも自己破壊的な欲求は低かったと考えられる。さらに作家以前の青年時代からの自分に関するもの蒐集癖について「自分が一番可愛い的だから、自己蒐集こそ最も意味があるのではないか」(江戸川, 1956b, p295) と述べ、自らの自己愛を表明している。

また母親は大の探偵小説好きで、父親が働きに出ている留守の間、こたつで小説を読み耽っていた。乱歩は当時を振り返り、「私は側に寝ころんで、よくその話を聞いたものだ。そういうふうにして探偵趣味者に養成されている」

(江戸川, 1926c, p91) と述べ、あたたかく自由度の高い養育環境の中、母親からの感化によって自らの適性を早くに自覚し、「活字との密約」により次世代に継承すべきものを見出すことができたと考えられる。

3) 人との社交経験による慣れ

戦前の乱歩は「恐ろしく非社会的で、作家の会合などにも、殆んど顔を出さなかった」(江戸川, 1952, p149) という。しかし47歳には太平洋戦争が勃発し、事実上の出版禁止状態となり、「多分、新聞などに現れる世間の風潮が、私をさえ動かしたのであろう。又、そのころから町内の防空訓練が烈しくなって来て、バケツ・リレーなどの練習には、各家庭必ず一人は出なければならぬ情勢となり、まさか女房任せにしてもおけず、私自身隣組つき合いを始めることとなったのだと思う。」(江戸川, 1957a, p54) と述べている。乱歩は隣組防空郡長や町会役員などを「大いに奉仕する気持で、これを承諾した。」(江戸川, 1957a, p56)。「思い出して見ると、そのころは、なかなか張り切っていたもので、無料奉仕なのだから、気がねがないし、雑用はすべて区役所の官吏がやってくれるので、ひとかどの識者にでもなったつもりで、大いに働いた」(江戸川, 1957b, p113) という。「戦争で酒に慣れ、人に慣れた。まず隣組というもので人に慣れ、町会や警防団や区の翼壮などの役員で人前に出ることに慣れ、人前で喋ることに慣れ、それからみんなと呑んで騒ぐことに慣れた。五十を過ぎて、やっとそこまで来たのである。(中略) そんなことから、戦後は人見知りをしなくなり、凡俗化して酒を愛し、宴会を愛する

ようになった。年のせいであつかましくなったのだとすると自己嫌悪だが、今では昔ほどの自己嫌悪もない。自然のなり行きにまかせて、ことさら改める気にならないのである。」(江戸川, 1957e, p300-301)と述べている。しかしながら人との社交経験による慣れについては、基本的信頼感が関わってくることであり、基本的信頼感が低い場合はまず第一に基本的信頼感の補償が必要になると考えられる。

4) 集団主義傾向の高さ

乱歩の場合は上述のように、そもそも基本的信頼感を基盤として親子関係がよく、友人関係や夫婦関係にも恵まれ、それぞれの関係が良好だったと考えられる。妻も「主人はじつに友人を大切にする人だということです。(中略)けっきょく友人を大切にしたことから、友人関係がよくなり主人自身を助けてよい結果になったのでしょう。」(平井, 1954, p188-189)と述べている。また隣組の常会に出席した経緯についても、「町内の防空訓練が烈しくなって来て、バケツ・リレーなどの練習には、各家庭必ず一人は出なければならない情勢となり、まさか女房任せにしてもおけず、私自身隣組つき合いを始めることとなったのだと思う。」(江戸川, 1957a, p54)と述べているように、対人恐怖心性はありながらも家族の一員としての役割を果たそうという意識は持っていた。また国民を鼓舞するような小説は書けなかったという乱歩だったが、「国が亡びるかどうかというときに、たとえ戦争そのものには反対でも、これを押しとどめる力がない以上は、やはり戦争に協力するのが国民の当然」(江戸川, 1957a, p74)だと

いう考えから、地元の町会や警防団で熱心に働いたと説明している。このように乱歩は、「家系を大切にし、時には封建道徳めいたことも口にする」(平井, 2006, p19-20)のような、集団主義傾向の高い人物だったことがうかがえる。このように乱歩は友人として、家族の一員として、国家の一員としての役割を果たすことを当然のことと感じていたことは、対人恐怖心性が高い中でも人との社交経験を後押ししたと考えられる。

おわりに

本論文では、アイデンティティ形成のさらに先の段階である第Ⅶ段階世代継承性の発達についても視野に入れ、生涯発達における青年期の対人恐怖心性とトータリティの様相を明らかにし、トータリティから再びホールネスに再統合される過程について検討した。その結果、アイデンティティが確立していくにしたがってトータリティが弱まり、ホールネスに再統合されていくことが示唆された。

青年期はそもそも自分のアイデンティティに関心が高まる時期であり、大野(2010)は人間のエネルギー量を10と仮定した場合、青年は「自分9:相手1」だと述べている。ところが成人になるとアイデンティティから世代継承性へ関心が移行し「自分1:相手9」という配分でエネルギーを使用することが可能となり、本当の意味で世代継承性を発揮できる状態になる(大野, 2010)。ところが青年期に「自分5:相手5」としたり、親孝行(親の期待に添う)・評価懸念(相手の期待に添う)・過剰適応(場面・周囲・社会の要請に添う)のように「自分1:

相手9」の場合、関心の移行がスムーズに進まない可能性が考えられる。そういう意味では、乱歩のように対人恐怖心性に悩むほど自意識過剰な青年は、今は苦しくとも、その後の発達を考えた場合、よりよい成人期への準備段階ととらえることもできるかもしれない。

また基本的信頼感が重要なのはいうまでもない。Erikson (1964) は「青年に達するまでの間に受けた愛が、次の成人期になって、他人へ与えられる〈はぐくみ〉へ移行していく」(Erikson, 1964, p125) と述べている。平成25年度小学生・中学生の意識に関する調査(内閣府, 2014)によると、平成18年の調査結果と比較しても、親子関係は良くなってきたといえる(池田, 2017)。しなしながら、頼りにならないお父さんが9%、お母さんが6%、自分の気持ちをわかってくれないお父さんが18%、お母さんが10%は存在していることも確かである(内閣府, 2014)。したがって家庭で基本的信頼感を育てていくことができなかつた子どもたちのケアをどのようにしていくのかという問題は、生徒指導・進路指導という観点から考えた場合に、大きな課題となっていこう。学校だけで対応できる問題ではないため、社会の問題として提起し続けることが大切だと考えられる。

今回、対人恐怖心性を抱える青年ということで江戸川乱歩を取り上げたが、乱歩もいじめ、不登校、ひきこもりを経験していた。「ひきこもり」という現象は、なんらかの理由(発達障害、いじめ、不登校など)によって自己を発達させる機会を阻まれた若者たちが、脆弱な自己を崩壊から守るために、過剰にリスクをコントロールすることによって生じている」(村澤, 2018,

p91)と指摘されている。近年、ひきこもりの若者への支援において、社会的スキルの向上を主眼にした枠組みが提示されているが、彼らが抱えているリスクは生まれもつての特性であったり社会的な要因であるため、個人ではコントロールしきれないにもかかわらず、自己責任で対処が迫られてきたといえる(村澤, 2018)。「はじめに」で述べたように、一律に社会的スキルを身に付けさせようとする方向性は、トータリティに頼りながらアイデンティティ形成の過程にある青年たちをさらに追いつめる可能性がないだろうか。Eriksonは、適応、画一性、規格化を求める要求の増大がなければ、否定的アイデンティティの選択は必然的なものではないと述べている(Erikson, 1968)。Table1の「大学生の対人恐怖心性尺度(堀井・小川, 1996, 1997)得点の推移」は、もしかすると社会的スキルを過度に求められている青年たちの叫びなのかもしれない。

引用文献

- 相澤直樹(2004). 自意識過剰 谷 冬彦・宮下一博(編)さまよえる青少年の心—アイデンティティの病理—発達臨床心理学的考察 北大路書房 pp.43-49.
- 江戸川乱歩(1926a). 今ひとつの世界 大阪朝日新聞 江戸川乱歩(2005). 我が夢と真実 江戸川乱歩全集第30巻 光文社 pp.130-133.
- 江戸川乱歩(1926b). 恋と神様 女性/苦楽 江戸川乱歩(2005). 我が夢と真実 江戸川乱歩全集第30巻 光文社 pp.41-45.
- 江戸川乱歩(1926c). 私の探偵趣味 大衆文

- 芸 江戸川乱歩 (2005). 我が夢と真実 江戸川乱歩全集第 30 巻 光文社 pp.90-94.
- 江戸川乱歩 (1926d). 講談社もの 探偵小説三十年 江戸川乱歩 (2005). 我が夢と真実 江戸川乱歩全集第 30 巻 光文社 pp.183-188.
- 江戸川乱歩 (1935). 幻影の城主 東京日日新聞 江戸川乱歩 (2005). 我が夢と真実 江戸川乱歩全集第 30 巻 光文社 pp.123-129.
- 江戸川乱歩 (1936). レンズ嗜好症 ホーム・ライフ 江戸川乱歩 (2005). 我が夢と真実 江戸川乱歩全集第 30 巻 光文社 pp.60-64.
- 江戸川乱歩 (1951). 余技時代 江戸川乱歩 (2006). 探偵小説四十年 (上) 江戸川乱歩全集第 28 巻 光文社 pp.67-90.
- 江戸川乱歩 (1952). 探偵作家專業となる 江戸川乱歩 (2006). 探偵小説四十年 (上) 江戸川乱歩全集第 28 巻 光文社 pp.90-180.
- 江戸川乱歩 (1953a). 放浪の年 江戸川乱歩 (2006). 探偵小説四十年 (上) 江戸川乱歩全集第 28 巻 光文社 pp.279-324.
- 江戸川乱歩 (1953b). わが青春期 東京新聞 江戸川乱歩 (2005). 我が夢と真実 江戸川乱歩全集第 30 巻 光文社 pp.77-79.
- 江戸川乱歩 (1954). 最初の江戸川乱歩全集 江戸川乱歩 (2006). 探偵小説四十年 (上) 江戸川乱歩全集第 28 巻 光文社 pp.432-498.
- 江戸川乱歩 (1955a). 小栗、木々の登場 江戸川乱歩 (2006). 探偵小説四十年 (上) 江戸川乱歩全集第 28 巻 光文社 pp.577-656.
- 江戸川乱歩 (1955b). 活字との密約 日販『新刊月報』 江戸川乱歩 (2005). 我が夢と真実 江戸川乱歩全集第 30 巻 光文社 pp.75-76.
- 江戸川乱歩 (1956a). 甲賀・木々論争 江戸川乱歩 (2006). 探偵小説四十年 (上) 江戸川乱歩全集第 28 巻 光文社 pp.657-733.
- 江戸川乱歩 (1956b). 蒐集癖 春陽堂『江戸川乱歩全集』付録冊子 江戸川乱歩 (2005). 我が夢と真実 江戸川乱歩全集第 30 巻 光文社 pp.294-296.
- 江戸川乱歩 (1957a). 末端の協力 江戸川乱歩 (2006). 探偵小説四十年 (下) 江戸川乱歩全集第 29 巻 光文社 pp.48-96.
- 江戸川乱歩 (1957b). 愈々協力に励む 江戸川乱歩 (2006). 探偵小説四十年 (下) 江戸川乱歩全集第 29 巻 光文社 pp.97-146.
- 江戸川乱歩 (1957c). 三十歳のころ 読売新聞 江戸川乱歩 (2005). 我が夢と真実 江戸川乱歩全集第 30 巻 光文社 pp.120-122.
- 江戸川乱歩 (1957d). 町会と翼壮 江戸川乱歩 (2005). 我が夢と真実 江戸川乱歩全集第 30 巻 光文社 pp.208-214.
- 江戸川乱歩 (1957e). 酒とドキドキ『酒』 江戸川乱歩 (2005). 我が夢と真実 江戸川乱歩全集第 30 巻 光文社 pp.300-303.
- 江戸川乱歩 (1958a). 探偵小説復活の昂奮 江戸川乱歩 (2006). 探偵小説四十

- 年(下) 江戸川乱歩全集第29巻 光文社 pp.194-250
- 江戸川乱歩 (1958b). 探偵作家クラブ結成 江戸川乱歩 (2006). 探偵小説四十年(下) 江戸川乱歩全集第29巻 光文社 pp.251-293.
- 江戸川乱歩 (1958c). 父母のこと 江戸川乱歩 (2005). 我が夢と真実 江戸川乱歩全集第30巻 光文社 pp.33-41.
- 江戸川乱歩 (1959). 探偵小説第三の山 江戸川乱歩 (2006). 探偵小説四十年(下) 江戸川乱歩全集第29巻 光文社 pp.294-370.
- 江戸川乱歩 (1962). 追記 江戸川乱歩 (2006). 探偵小説四十年(下) 江戸川乱歩全集第29巻 光文社 pp.600-634.
- Erikson, E.H. (1964). *Insight and responsibility*. New York: Norton. (鏑幹八郎(訳) (1972). 洞察と責任 誠信書房)
- Erikson, E.H. (1968). *Identity: Youth and crisis*. New York: W. W. Norton & Company. (岩瀬庸理(訳) (1982). アイデンティティ—青年と危機— 金沢文庫)
- 原田朋枝・島田 修 (2002). 社会的スキルの自己評価と対人不安との関連 川崎医療福祉学会誌, 12 (1), 75-81.
- 平井 隆 (1954). 夫を語る 平井隆太郎 (2006). うつし世の乱歩—父・江戸川乱歩の憶い出 河出書房新社 pp.187-191.
- 平井隆太郎 (2006). うつし世の乱歩—父・江戸川乱歩の憶い出 河出書房新社
- 堀井俊章 (2011). 大学生における対人恐怖心性の時代的推移 横浜国立大学教育人間科学部紀要, 13, 149-156.
- 堀井俊章・小川捷之 (1996). 対人恐怖心性尺度の作成 上智大学心理学年報, 20, 55-65.
- 堀井俊章・小川捷之 (1997). 対人恐怖心性尺度の作成(続報) 上智大学心理学年報, 21, 43-51.
- 池田 幸恭 (2017). 青年期の親子関係 高坂康雅・池田 幸恭・三好 昭子(編) レクチャー 青年心理学 —学んでほしい・教えてほしい青年心理学の15のテーマ— 風間書房 pp.79-94.
- 笠原 嘉 (1993). 対人恐怖 加藤正明他(編) 新版精神医学事典 弘文堂 p515
- 経済産業省 (2006). 社会人基礎力 <http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/> (2017年10月9日閲覧)
- 木村 大樹 (2019). 自閉スペクトラム症傾向の高い大学生の対人不安の特徴——自尊感情および公的自意識との関連からパーソナリティ研究, 28 (2), 97-107.
- 三好昭子 (2008). 谷崎潤一郎の否定的アイデンティティ選択についての分析 発達心理学研究, 19 (2), 98-107.
- 三好 昭子 (2014). 全体主義が青年に及ぼす影響: 否定的アイデンティティの観点から帝京大学短期大学紀要, 34, 89-100.
- 三好昭子 (2015). 青年期のトータリズムにおける最初のホールネスの影響: 比較伝記分析による検討 日本青年心理学会第23回大会発表論文集, 32-33.
- 三好 昭子 (2016). アイデンティティ理論におけるホールネスとトータリティ: 生徒

- 指導・進路指導におけるトータリティの問題 帝京大学短期大学紀要, 36, 115-130.
- 三好昭子 (2018). 中高生のアイデンティティ形成および生徒・進路指導に潜むトータリティ 教職研究, 30, 61-71.
- 文部科学省 (2017). 学習指導要領「生きる力」平成 29・30 年改訂学習指導要領のくわしい内容 https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1383986.htm (2020 年 1 月 26 日閲覧)
- 文部科学省 (2010). 学校・家庭・地域が力をあわせ, 社会全体で, 子どもたちの「生きる力」をはぐくむために～新学習指導要領スタート～ https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/pamphlet/_icsFiles/afieldfile/2011/07/26/1234786_1.pdf (2020 年 1 月 26 日閲覧)
- 村澤和多里 (2018). 心理—社会的現象としての「ひきこもり」—1009 年代後半の若者たちの生活体験をめぐって— 北海道大学大学院教育学研究院紀要, 132, 75-97.
- 内閣府 (2014). 平成 25 年度小学生・中学生の意識に関する調査 Retrieved from http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/thinking/h25/junior/pdf_index.html (2020 年 1 月 30 日閲覧)
- 永井 徹 (1994). 対人恐怖の心理——対人関係の悩みの分析 サイエンス社
- 岡田 努・永井 徹 (1990). 青年期の自己評価と対人恐怖の心性との関連 心理学研究, 60, (6), 386-389.
- 大野 久 (2010). アイデンティティ・親密性・世代性：青年期から成人期へ 岡本 祐子 (編) 成人発達臨床心理学ハンドブック：個と関係性からライフサイクルを見る ナカニシヤ出版 pp.61-72.
- OECD (2018). The future of education and skills: Education 2030 Retrieved from <https://www.oecd.org/education/2030-project/about/documents/> (2020 年 1 月 26 日閲覧)
- 小川捷之 (1974). いわゆる対人恐怖症者における「悩み」の構造に関する研究 横浜国立大学教育紀要, 14, 1-33.
- 清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 (2005). 青年期における対人恐怖心性と第 2 の分離固体化の関連について 心理臨床学研究, 23 (5), 579-590.
- 清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 (2007). 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の相互関係について 心理学研究, 78 (1), 9-16.
- 清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 (2008). 対人恐怖心性 - 自己愛傾向 2 次元モデルにおける自我同一性の様相 心理臨床学研究, 26 (1), 97-103.
- 清水 健司・岡村 寿代 (2010). 対人恐怖心性 - 自己愛傾向 2 次元モデルにおける認知特性の検討：—対人恐怖と社会恐怖の異同を通して— 教育心理学研究, 58, (1), 23-33.
- 志村有弘 (2009). 江戸川乱歩徹底追跡 勉誠出版
- 谷 冬彦 (1997). 青年期における自我同一性と対人恐怖の心性 教育心理学研究, 45 (3), 254-262.

中央教育審議会 (2008). 学士課程教育の構築に向けて (答申) http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm (2020年1月30日閲覧)

中央職業能力開発協会 (2004). 若年者就職基礎能力修得のための目安策定委員会報告書 <http://www.mhlw.go.jp/houdou/2004/07/dl/h0723-4h.pdf> (2020年1月30日閲覧)

渡部 敦子 (2011). 大学生の被援助志向性について - 対人恐怖心性との関連 - 日本心理学会第75回大会発表論文集, 49.

山田裕子・宮下一博 (2014). 対人恐怖心性を抱える大学生女性のアイデンティティ形成過程: 事例を通しての一考察 千葉大学教育学部研究紀要, 62, 99-106.

付記

本論文は日本青年心理学会第21回大会(2013)における自主シンポジウム「成熟した人格とは何か」, 日本発達心理学会第28回大会(2017)における自主シンポジウム「現代社会と青年の将来—アイデンティティと世代継承性のゆくえ—」において話題提供された内容の一部を中心に再分析したものである。